

世界へ進出した商人国家オランダ

スペインの支配から独立し、世界各地へ進出したオランダ

15世紀末からハプスブルク家の支配下にあったネーデルラントは、早くから毛織物工業で栄え、バルト海交易など商業も発達していた。宗教は利潤追求を認めるカルヴァン派（91参照）が多数を占めていたが、16世紀後半になって宗主国スペインのフェリペ2世がカトリックを強制し、都市に重税を課すようになると、貴族や商工業者はこれに反発。1568年にはオラニエ公ウィレムを指導者として、オランダ独立戦争が始まった。

戦争が長期化すると、カトリックの多かった南部10州は脱落したが、北部7州はユトレヒト同盟を結んで戦いを続け、81年に独立を宣言。ネーデルラント連邦共和国（オランダ）が成立した。そして1609年にスペインと休戦したのち、48年のウエストファリア条約で正式に独立が承認された。

オランダは当時、最先端の造船技術をもち、独立戦争中も「海洋の自由」を主張して、アメリカなどに進出していた。02年にはイギリスについで東インド会社を設立し、バタヴィア（現ジャカルタ）を拠点として、日本を含むアジアの諸地域にも進出。アムステルダムは国際商業の中心都市として繁栄した。

オランダの独立と世界進出

オランダの独立(1648年)

スペインによるカトリックの強制や重税に反発したネーデルラントは、独立戦争によって北半分がスペインから独立する。



独立戦争を戦いながら、オランダは国際商業の中心になっていった。



オランダの世界進出(17世紀)

独立前から優れた造船技術で世界の海運を左右していたオランダは、東インド会社や西インド会社を設立(1621年)し、世界各地に進出した。

